

## ジーロフト / シャハレ・ダキアヌス

著者	薮 勇造
雑誌名	金沢大学考古学紀要
巻	26
ページ	48-49
発行年	2002-12-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/1601">http://hdl.handle.net/2297/1601</a>

# ジーロフト/シャハレ・ダキアヌス

部 勇 造

## 1. 文献史料に見るジーロフト

シャハレ・ダキアヌス *Shahr-e Daqianus* (「ダキアヌスの町」の義) は、ケルマーン地方の現在のジーロフト *Jiroft* 市の郊外にある遺跡である。この町の名はジールフト、ジーラフトという形でも文献に現れる。管見の及んだ範囲では、前イスラーム期の史料の中にこの地名に言及した記録はない。しかしこの名で呼ばれる都市が遅くともサーサーン朝期に存在していたことは、次に挙げるイスラーム期の史書の記事から窺える。かつて栄えたジーロフトの遺跡がシャハレ・ダキアヌスであろうというのが一般の解釈であるが、現在のジーロフトとの関係も含めて、正確なことは今後の調査・研究にかかっている。

この地名に最初に言及した文献は、バラズリー *al-Balādhuri* (892年頃没) の『諸国征服史』である。それによると、アラブ・ムスリム軍によるケルマーン地方再征服の一環として、ムジャーシウ・ブン・マスウードがジーラフトを武力で征圧したという(花田訳、132頁)。バラズリーはそれが何年の事件であったとは述べていないが、フライ *R.N. Frye* は『イスラーム百科事典』の中でこれを 35 A.H./655 A.D. の事件と記している。

その後ウマイヤ朝期には、この辺りは反体制派のハワーリジュ派の活動が猖獗を極めたようで、タバリー *al-Ṭabarī* (923年没) の『諸使徒と諸王の歴史』に関連の記事が残されている。まず 77 A.H./696-7 A.D. には、ウマイヤ朝カリフ軍は当時ケルマーンの首府であったジールフトを中心として、1年以上にわたるハワーリジュ派との激しい戦闘の末、ようやくファールス地方から彼らを撃退したと記されている (Rowson 訳、Vol.22, 150頁)。また同王朝末期の 129 A.H./746-7 A.D. には、再びジーラフトでハワーリジュ派との戦闘が記録されている (Rowson 訳、Vol. 27, 59頁)。

9世紀の後半にシースターン出身のヤアクブ *Ya'qub* がイラン高原に樹立した地方政権はサッフール朝と呼ばれ、彼の兄弟のアムル *Amr* の治世を含めて40年近く続いた(867-903年)。彼らとジーロフトとのかかわりが、この町の北東に位置するバム *Bam* の歴史を記した古写本から窺えるということを、サイクス *Sir Percy Sykes* が次のように伝えている。

Many years ago I was allowed to see and make a précis of an old manuscript history of Bam by a certain Sayyid Tahir-u-Din ibn Shams-u-Din of Bam. In it *Yakub* and his brother are praised, the former for improving the city of **Jiruft** and the latter for building a mosque in it. (Sykes, p.16, n.1)

以上は政治的な事件との絡みでジーロフトへの言及が行われ

た例で、いずれも極めて断片的な内容である。それに対し10世紀に入ると、地理書の中でこの町について詳しい説明が行われるようになる。

まず、その名からしてファールス地方の出身と思われるイスタフリー *Istakhrī* の地理書(10世紀半ば近くの作)には次のように記されている。

ジールフトは2マイルの長さがあり、ホラーサーンとシジスターンの交易の中心地である。寒い土地と暑い土地の両方の快適さが、ここにはある。雪と新鮮な棗椰子と胡桃とレモンがある。水を住民はディーウールドから引いている。ジールフトは非常に肥沃であり、農地は人為的に灌漑されている。(Schwarz, p.241)

同世紀の後半に著されたムカッダシー *al-Muqaddasī* の地理書にはさらに詳しい記事があり、その繁栄振りがしのばれる。その英訳を以下に引用する。

**Jiruft** is the finest of the capitals, a source of fruits and produce. In it are assembled all varieties of things, here are parks and gardens. The markets, the baths are splendid, bread and meats are clean; the water melon is sweet. However, the heat is intense, and there are injurious things here. Along with that there are bedbugs and snakes; and but little knowledge or instruction. Over the town is a fortress. The town has four gates—*Bāb al-Sābūr*, *Bāb al-Bamm*, *Bāb al-Sirājān*, *Bāb al-Musallā* (the gate of the oratory). The mosque stands at the edge of the town close to the *Bamm* gate, built of burnt brick and mortar, far removed from the markets. The inhabitants derive their drinking water from a stream that flows through the streets and the markets; it has a strong flow, turning twenty mill wheels. The town is bigger than *Istakhr*. The building is of clay on stone foundations. Snow is brought hither, and a stream flows in the mosque. The rural district is very fine indeed, assembling in its gardens date palms, walnuts; here are finest narcissus and bitter orange, and the breezes are filled with aroma from them both. This is a fine respectable city. (Collins 訳、409頁)

From the districts around **Jiruft** are raised much indigo, cumin; and the people make sweetmeats and sugar syrop for sale at a low price. The most common food of the people of this district consists of *durra* and dates. (同 412頁)

この他のアラビア語の地理書にもこの町への言及はあり、それらはシュヴァルツによって収録されている (Schwarz, pp. 240-242)。しかしいずれも短いもので、イスタフリーやムカッダシーの記事以上のことは書かれていないので省略する。

11世紀にはこの一帯はグズ・トルコマン系のセルジューク族の一派(ケルマーン・セルジューク朝:1041-1186)の支配を受けるようになった。この王朝については、17世紀にイブン・イブラーヒーム Muhammad b. Ibrāhīm が著した年代記が残っている。それによると、ジーロフト郊外のカマーディーン/クマーディーン Qamādīn/Qumādīn にはバザールと倉庫があり、ルームやインドから来た外国商人も見受けられたが、12世紀の後半になると、王朝内の権力闘争による混乱の中で、周辺一帯はしばしばトルコマン遊牧民の略奪を被り、次第に荒廃への道をたどったようである(Houtsma, p. 380; Le Strange, p. 315)。

カマーディーンはおそらくジーロフトの城壁の外に新しく発展した商業区であったと推察されるが、両者の位置関係はよくわからない。

1272年頃にこの地を通過したマルコ・ポーロは『東方見聞録』第1章第37節において、こちらの地名を挙げて次のように述べている。

上記した二日行程の傾斜地を下りきると一大平原にさしかかる。この平原のかかり口にカマディという都市がある。ここも昔はすばらしくりっぱな町だったが、侵略者たるタルタル人の数回にわたる劫略をうけて、今では往日の面影を留めないまでにさびれている。この平原の暑気は恐ろしく厳しい。(愛宕訳)

マルコがカマディと呼んでいるのは、実際には荒廃したジーロフトではなかったかと思われる。

この町はティムール朝期までは存続し、その後史料から姿を消すという(Frye, p. 553b)。

## 2. 調査記録

シャハレ・ダキアヌス遺跡の調査といえば、スタイン A. Stein が1932年4月に行ったものが有名で(Stein, pp. 151-157)後世の研究者によってしばしば引かれているが、実はそれより80年以上前にテヘラン駐在のイギリス領事アボット K.E. Abbott がここを訪れて簡単な記録を残している(Abbott, pp. 46-47)。彼は1849年10月2日にテヘランを出発した後、サヴェー、イスパハーン、ヤズド、ケルマーン、バムを経て、1850年1月19日にジーロフトに達し、翌20日にこの遺跡を訪れて所見を残した。またパルティア貨幣1点を入手したとも記しているが、磨耗がひどく銘文も判読不能とのことなので、著者がこれをパルティア貨幣と判断した理由は不明である。

因みにダキアヌスというのは3世紀半ばにキリスト教徒の迫害を行ったローマ皇帝デキウスのことで、彼の迫害と結び付けて語り継がれる「エフェソスの7人の眠り人」の伝説が、コーランの「洞窟の章」にも見られるようにイスラム世界にも伝播して変容し、その結果、各地に「ダキアヌスの町」と呼ばれる遺跡が存在するという(Cf. Stein, p. 151, n. 3)。

日本からは、1994年1月に出光調査隊が訪れてサーヴェイを行い、隊員の岡野が遺跡の表面に散乱する陶磁器に関する報告を残している。

## REFERENCES

- Abbott, Keith E., "Geographical Notes, taken during a Journey in Persia in 1849 and 1850", *Journal of the Royal Geographic Society*, 25, 1855, pp.1-78.
- al-Balādhurī, *Kitāb futūḥ al-buldān*,  
 バラーズリー『諸国征服史』-19- (花田宇秋訳『明治学院論叢』第584号, 1996年10月, 87-172頁)
- Frye, R.N., *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Vol.2, p.553b, s.v. "DJĪRUFT"
- Houtsma, M.Th., "Zur Geschichte der Selguquen von Kermān", *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 39 1885, pp.362-402.
- Istakhri, *Kitāb al-Masālik wa'l-mamālik*.
- Le Strange, G., *The Lands of the Eastern Caliphate*, Cambridge, 1905.
- al-Muqaddasī, *Aḥsan al-taqāsīm fi ma'rifaṭ al-aqālīm*.  
*The Best Divisions for Knowledge of the Regions*, translated by B.A. Collins, reviewed by M.H. al-Tai, Reading, 1994.
- Schwarz, P., *Iran im Mittelalter nach den arabischen Geographen*, I-III (Islamic Geography 108), Frankfurt am Main, 1993 (1st ed.: Leipzig, 1896, 1910, 1912)
- Stein, Sir Aurel, *Archaeological Reconnaissances in North-Western Inde and South-Eastern Iran*, London, 1937.
- Sykes, Sir Percy, *A History of Persia*, Vol.2, London, 1921 (1st ed. 1915)
- al-Ṭabarī, *Ta'riḫ al-rusul wa'l-mulūk*.  
*The History of al-Ṭabarī*, Vol.22, 27, translated and annotated by Everett K. Rowson, Albany, 1985, 1989.
- マルコ・ポーロ(愛宕松男訳注)『東方見聞録1』(東洋文庫158)平凡社, 昭和45年
- 岡野智彦「シャハレ・ダキアヌスの陶磁器」『MECCJ』4号, 1995年, 12-14頁